

平成24年度採択プログラム 事後評価調書

博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表。ただし、項目13については非公表]

機関名	長崎大学	整理番号	O05
1. 全体責任者  (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。  (ふりがな) こうの しげる 氏名・職名 河野 茂 (長崎大学学長) (平成29年10月1日変更)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) しもかわ いさお 氏名・職名 下川 功 (長崎大学理事(研究・国際担当)) (平成29年10月1日変更)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) もりた こういち 氏名・職名 森田 公一 (長崎大学熱帯医学研究所・教授)		
4. 類型	○ <オンリーワン型>		
5.	プログラム名称	熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム	
	英語名称	Program for Nurturing Global Leaders in Tropical and Emerging Communicable Diseases	
	副題	世界の安全, 安心に寄与する感染症制御専門家, リーダーの養成を目指して	
6. 授与する博士 学位分野・名称	博士(医学): 熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム修了		
7. 主要分科	(① ) (② ) (③ ) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入		
	社会医学, 内科系臨床医学, 基礎医学		
8. 主要細目	(① 衛生学・公衆衛生学 ) (② 感染症内科学 ) (③ ウイルス学 ) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	大学院医歯薬学総合研究科・新興感染症病態制御学系専攻, 熱帯医学研究所		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名			
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名			
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名, 研究科専攻等名)			

14. プログラム担当者の構成 計 36 名					
外国人の人数		7 人	[ 19.4 %]	女性の人数	
				4 人 [ 11.1 %]	
プログラム実施大学に属する者の割合 [ 100.0 %]					
プログラム実施大学に属する者			36 人	プログラム実施大学以外に属する者	
そのうち、他大学等を経験したことのある者			36 人	そのうち、大学等以外に属する者	
				0 人	
				0 人	
15. プログラム担当者					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成30年度における役割)
(プログラム責任者) 下川 功 (平成29年10.1追加)	シカガ イサ		理事(研究・国際担当)	実験病理学, 人体病理学, 環境生理学 (含体力医学・栄養生理学) ・医学博士	プログラム責任者(プログラム運営の統括)
(プログラムコーディネーター) 森田 公一	モリタ コウイチ		熱帯医学研究所・教授	ウイルス学 ・医学博士	コーディネーター(プログラム実施の統括), 感染症危機管理学特論, コミュニケーション教育推進, 学位論文指導
西田 教行	ニシダ ナリユキ		大学院医歯薬学総合研究科・新興感染症病態制御学系専攻・教授	病原微生物学 ・博士(医学)	サブコーディネーター(基礎医学領域担当)
泉川 公一	イズミカワ コウイチ		大学院医歯薬学総合研究科・新興感染症病態制御学系専攻・教授	感染症学, 感染制御学, 真菌学 ・博士(医学)	サブコーディネーター(専門教育領域担当), 感染制御学特論
山本 太郎	ヤマモト タロウ		熱帯医学研究所・教授	国際保健学, フィールド医学 ・博士(医学・国際保健学)	サブコーディネーター(海外実践教育担当), 国際保健学, コミュニケーションスキル, 学位論文指導
西原 俊明 (平成30年4.1追加)	ニシハラ トシアキ		言語教育研究センター・センター長・教授	言語学(英語学), 英語学 (英語教育)・言語学 博士, 教育学 修士	サブコーディネーター(コミュニケーション教育の統括)
須齋 正幸	スサイ マサユキ		経済学部総合経済学科・教授	国際金融論 ・商学修士	リスク管理学特論, 国際経済学特論, 国際法学特論
門司 和彦	カドモリ ワカヒコ		熱帯医学・グローバルヘルス研究科・教授	人類生態学, 熱帯公衆衛生学 ・保健学 博士	医療人類学特論
Laothavorn Juntra	ロソハーン チャントラ		熱帯医学研究所・教授	臨床開発学・ 理学博士	倫理学特論, コミュニケーションスキル, 学位論文指導
金子 修	カネコ シユ		熱帯医学研究所・教授	寄生虫学, 原虫病学 ・博士(医学)	寄生虫学特論, 学位論文指導
濱野 真二郎	ハマノ シンジロウ		熱帯医学研究所・教授	寄生虫学, 免疫学 ・博士(医学)	学位論文指導
平山 謙二	ヒラヤマ ケンジ		熱帯医学研究所・所長・教授	免疫遺伝学・ 医学博士	倫理学特論, 学位論文指導

15. プログラム担当者一覧(続き)					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
皆川 昇	ミカワ ノボル		熱帯医学研究所・教授	環境医学 ・PhD	病害動物学特論, コミュニケーションスキル, 学位論文指導
有吉 紅也	アリヨシ コウヤ		熱帯医学研究所・教授	感染症内科学 ・博士(医学)	熱帯感染症制御学特論, コミュニケーションスキル
橋爪 真弘	ハシヅメ マサヒロ		熱帯医学研究所・教授	疫学, 公衆衛生学・ 博士(医学)	フィールド疫学特論, コミュニケーションスキル
安田 二郎	ヤスタ シロウ		熱帯医学研究所・教授	ウイルス学・ 博士(理学)	ウイルス学特論, 学位論文指導
Culleton Richard Leighton	カルトン リチャード レイトン		熱帯医学研究所・准教授	寄生虫学 ・PhD	コミュニケーションスキル
森内 浩幸	モリウチ ヒロユキ		大学院医歯薬学総合研究科・医療科学専攻・教授	小児科学, ウ イルス学, 感 染症学・ 医学博士	熱帯感染症制御学特論
由井 克之	ユイ カツキ		大学院医歯薬学総合研究科・新興感染症病態制御学系専攻・教授	免疫学・ 医学博士	免疫学特論・学位論文指導
神谷 保彦	カミヤ ヤスヒコ		熱帯医学・グローバルヘルス研究科・教授	国際保健学・ 博士(医学)	国際保健学特論, コミュニケーションスキル
長谷部 太	ハセベ タシ		熱帯医学研究所・教授	ウイルス学・ 博士(医学)	フィールド研究支援(ベトナム), コミュニケーションスキル
柳原 克紀	ヤキハラ カツリ		大学院医歯薬学総合研究科・医療科学専攻・教授	臨床微生物 学, 感染症 学・ 博士(医学)	細菌学特論
金子 聰 (平成29年4.1追加)	カネコ サトシ		熱帯医学研究所・教授	疫学, 情報 学・ 博士(医学)	疫学統計特論, 学位論文指導
Moi Meng Ling (平成29年4.1追加)	モイ メンリン		熱帯医学研究所・准教授	ウイルス学・ 博士(医学)	感染症危機管理学特論, コミュニケーションスキル教育
北 潔 (平成29年4.1追加)	キタ キヨシ		熱帯医学・グローバルヘルス研究科・研究科長・教授	生化学, 寄 生 虫学・ 薬学博士	感染症創薬学, 学位論文指導
田中 義正 (平成29年10.1追加)	タナカ ヨシマサ		大学院医歯薬学総合研究科・分子標的医学研究センター・准教授	免疫学, 創 薬 (化学)・ 博士(農学)	学位論文指導

## 15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
吉田 レイミント (平成29年10.1追加)	ヨシダ レイミント		熱帯医学研究所・教授	ウイルス学, 細菌学(含真 菌学)・ 医学博士	学位論文指導
久保 嘉直 (平成29年4.1追加)	クボ ヨシナオ		大学院医歯薬学総合研究科・ 新興感染症病態制御学系専攻・准教授	ウイルス学・ 博士(医学)	生物医科学特論及び実習
石川 岳志 (平成29年4.1追加)	イシカワ タケシ		大学院医歯薬学総合研究科・ 新興感染症病態制御学系専攻・准教授	分子シミュ レーション, バイオイン フォアマティ クス・ 博士(理学)	生物医科学特論及び実習
Todd Saunders (平成29年4.1追加)	トッド サンダース		大学院医歯薬学総合研究科・ 新興感染症病態制御学系専攻・助教	地理学, 疫 学, 生物統計 学・ 博士(環境科 学)	コミュニケーションスキル補助
渡邊 健 (平成29年4.1追加)	ワタナベ ケン		大学院医歯薬学総合研究科・ 新興感染症病態制御学系専攻・助教	ウイルス学・ 博士(工学)	生物医科学特論及び実習
Ngyuen Huy Tien (平成29年4.1追加)	グエン フィ ティエン		熱帯医学研究所・准教授	感染症学, 寄 生虫学, 生 化学・ 博士(学術)	倫理学特論, コミュニケーションスキル
中村 梨沙 (平成29年4.1追加)	ナカムラ リサ		熱帯医学研究所・助教	感染免疫学・ 博士(医学)	生物医科学特論及び実習
Mohammad Monir Shah (平成29年4.1追加)	モハマド モニル シャー		熱帯医学研究所・助教	細菌学, 生 化学, 免疫学薬 理学・ 博士(医 学), 博士 (薬学)	早期海外研修, コミュニケーションスキル
竹村 太地郎 (平成29年4.1追加)	タケムラ タイチロウ		熱帯医学研究所・助教	ウイルス学, 熱帯微生物 学・ 博士(人間・ 環境学)	早期海外研修
隈上 麻衣 (平成29年4.1追加)	クマガミ マイ		言語教育研究センター・助教	応用言語学・ 修士(文学)	コミュニケーションスキル

## 16. プログラムの応募学生数、合格者数及び履修生数

本プログラムの過去のリーディングプログラム応募学生数等について記入してください。

(各年度3月31日現在(ただし平成30年度は提出日現在))

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度 *(今後の募集予定: 有 無)	
プログラム募集定員数	-	15	15	15	15	15	9	
① 応募 学生 数	-	25	20	18	15	15	9	
	うち留学生数	-	15	16	14	12	10	8
	うち自大学出身者数	- (-)	11 (7)	7 (7)	4 (3)	1 (1)	2 (1)	0 (0)
	うち他大学出身者数	- (-)	14 (8)	13 (9)	14 (11)	14 (11)	13 (9)	9 (8)
	うち社会人学生数	- (-)	3 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)
	うち女性数	- (-)	11 (7)	9 (6)	5 (3)	3 (2)	5 (2)	5 (4)
② 合格 者数	-	15	15	15	15	14	9	
	うち留学生数	-	10	12	12	12	9	8
	うち自大学出身者数	- (-)	4 (2)	4 (4)	3 (2)	1 (1)	2 (1)	0 (0)
	うち他大学出身者数	- (-)	11 (8)	11 (8)	12 (10)	14 (11)	12 (8)	9 (8)
	うち社会人学生数	- (-)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)
	うち女性数	- (-)	6 (4)	7 (5)	4 (3)	3 (2)	5 (2)	5 (4)
③ ②の うち 履修 生数	-	15	14	15	12	13	9	
	うち留学生数	-	10	11	12	9	8	8
	うち自大学出身者数	- (-)	4 (2)	3 (3)	3 (2)	1 (1)	2 (1)	0 (0)
	うち他大学出身者数	- (-)	11 (8)	11 (8)	12 (10)	11 (8)	11 (7)	9 (8)
	うち社会人学生数	- (-)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)
	うち女性数	- (-)	6 (4)	7 (5)	4 (3)	2 (1)	4 (1)	5 (4)
プログラム合格倍率 (応募学生数/合格者数) (小数点第三位を四捨五入)	-	1.67倍	1.33倍	1.20倍	1.00倍	1.07倍	1.00倍	
充足率 (合格者数/募集定員)	-	100%	100%	100%	100%	93%	100%	

※留学生については、「うち留学生数」にカウントするとともに、うち自大学出身者数、うち他大学出身者数、うち社会人学生数、うち女性数の()に内数を記入してください。

※平成30年度\*(今後の募集予定:有・無)については、平成30年度内に履修を開始する学生を募集予定の場合(秋入学等)は「有」に、募集予定がない場合は「無」に印を付けてください。

また、「有」の場合は、当該予定分については表中には含めず、備考欄へ募集時期及び募集予定人数を記入してください。

※編入学生がいる場合は、年度ごとの内訳を備考欄に記入してください。



17. プログラムの履修生数・修了(予定)者数  
②医・歯・獣医学の4年制博士課程

[公表(備考欄を除く)]  
(各年度3月31日現在(ただし平成30年度は提出日現在))

プログラムの履修生数等	履修生数 (選抜年度内辞退は除く。)					平成24年度 (H25.3.31)					平成25年度 (H26.3.31)					平成26年度 (H27.3.31)					平成27年度 (H28.3.31)					平成28年度 (H29.3.31)					平成29年度 (H30.3.31)					平成30年度 (提出日(H30.6))					H31.3.31 (見込)		修了 (見込)	辞退 (見込)																							
	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計	D1	D2	D3	D4	計	修了	辞退																														
平成24年度 選抜																																																																			
うち留学生数																																																																			
うち自大学出身者数																																																																			
うち他大学出身者数																																																																			
うち社会人学生数																																																																			
うち女性数																																																																			
平成25年度 選抜	15				15						15				15						15	15			15	15	10	1		1															4	4																					
平成26年度 選抜	11				11						11				11						11	11			11	11	7	1		1															3	3																					
平成27年度 選抜	7				7						7				7						7	7			7	6																			6	6																					
平成28年度 選抜	9				9						9				9						9	9			9	9	4																		9	9																					
平成29年度 選抜	4				4						4				4						4	4			4	4																			4	4																					
平成30年度 選抜	8				8						8				8						8	8			8	8																			8	8																					
計	78	0	0	0	78	0	0	0	0	0	15	0	0	0	15	14	15	0	0	29	15	13	15	0	43	12	14	12	15	53	13	12	13	16	54	14	16	8	20	58											35	5															
うち自大学出身者数					58										13					43					43																										26	4															
うち他大学出身者数					13										8					9					9																										9	1															
うち社会人学生数					1										1					1					1																										1	0															
うち女性数					28										15					15					29																										20	14															
修了者数																																									0	0																									
うち就職者数																																														0	0																				
辞退者数																																																			0	0															
うち就職に伴う辞退者数																																																								0	0										
プログラム履修生以外で、プログラムのカリキュラムの一部を受講している学生数																																																																		0	0

※16. プログラムの応募生数、合格者数及び履修生数と整合性を取ってください。  
 ※標準修業年限を超えて在学する者は、「D4」欄に計上してください。  
 ※満期退学者は修了者には含めず、退学した時期の「辞退」欄に含めてください。満期退学者のうち退学後に学位取得した者(プログラムが修了者と認定する場合に限る。)については学位取得した時期の「修了」欄に記入し、該当者の経緯について備考欄に記載するとともに、右端の「修了計」欄及び「辞退計」欄は二重計上とならないよう「辞退計」から該当数を差し引いてください。  
 ※「就職者数」にはプログラムを修了後に就職した者(起業した者も含む。)のみをカウントしてください。また、満期退学後就職した後に学位を取得した者はカウントしてください。なお、社会人学生の現職継続は含めてください。  
 ※辞退者(Q.Eによるものも含む)や満期退学者がいる場合は、年度毎の内訳およびその理由を備考欄に記入してください。

## リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

### 【プログラムの必要性と概要】

熱帯地域を中心とした開発途上国には世界人口の 8 割を超える人々が生活しており、今なおマラリア、デング熱、トリパノゾーマ症などの熱帯特有の感染症により多数の患者が発生している。一方、あらゆる分野で進展するグローバル化の潮流は地球規模でのボーダーレスなヒト、モノの移動とアジア・アフリカ地域における自然開発、人口増加、都市化をもたらし、熱帯病・新興感染症のアウトブレイクと伝播を容易にしている。その結果、健康被害や経済損失が広範囲に発生し、熱帯病・新興感染症は開発途上国のみならず先進諸国においても安全・安心な生活を脅かす重大な要因となっている。西ナイル熱のアメリカ大陸への侵入 (1999)、重症呼吸器症候群 (SARS) の出現と流行 (2002)、鳥インフルエンザ H5N1 のヒト感染の拡大 (2003)、新型インフルエンザ H1N1 のパンデミック (2009)、西アフリカでのエボラ病の大流行 (2014)、南アメリカでのジカ熱の流行と小頭症の多発 (2016) 等の事例は記憶に新しいところである。このような熱帯病・新興感染症対策には利用可能なリソース (機材、人材、資金等) を動員し正確な科学的根拠に基づき効果的な対応を主導できる優れたリーダーシップを備えた国際的人材の充実が急務である。

本学位プログラムにおいては、取り組むべき課題として「熱帯病・新興感染症の制御」を掲げた。この課題に取り組むため、本学大学院医歯薬学総合研究科に「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム」を設置して、グローバルな視点で国際リーダーとして活躍できる人材を育成するための大学院教育を開始した。具体的には学位論文作成を通して実施する分野別の専門教育に加え、本学が有するケニアとベトナムの研究施設とフィールド、WHO 等の国際機関、海外の協力研究施設、NGO 等において実地研修を含む分野横断的なカリキュラムによる実践的教育を実施した。これにより熱帯病・新興感染症を分子レベルから疾病制御のオペレーショナルなレベルまで、開発途上国から先進国まで包括的にその状況を俯瞰し、国際的に通用するコミュニケーション能力を身に付け、感染症危機対応にも知識を持つ人材を育成する。こうした人材には国際レベルの熱帯病・新興感染症制御および感染症危機に対応できる専門家としての活躍が期待され、日本および世界の「平和で安全・安心な生活を保障する人間社会の構築」への貢献につながる。

### 【特色】

4 年間 (早期修了の場合は 3 年間) の大学院博士課程の教育により、グローバルな環境で活動できる専門性と国際性を身に付けた熱帯病・新興感染症制御に資する専門家を育成するため下記の取組を実施した。

- ・充実した教授陣の英語による横断的カリキュラム
- ・教育期間全体を通じたコミュニケーションスキルの一貫教育
- ・海外拠点や国際機関等での感染症対策 On-the-job トレーニング、インターンシップ
- ・協力機関 (南アフリカ NICD, 2010 年学術協定締結済等) での BSL4 病原体取扱いトレーニング
- ・倫理教育の導入: 開発途上国における感染症対策専門家に要求される高い倫理性の涵養
- ・学生の選抜: 本学の医学部および修士課程から一貫して熱帯病を学ぶ学生の受入れ
- ・学生への経済的支援: 奨励金制度, 海外研修経費の支給制度による経済負担の軽減措置
- ・学生への精神的支援: メンター制度の充実 (国際機関勤務経験者による進路相談等)

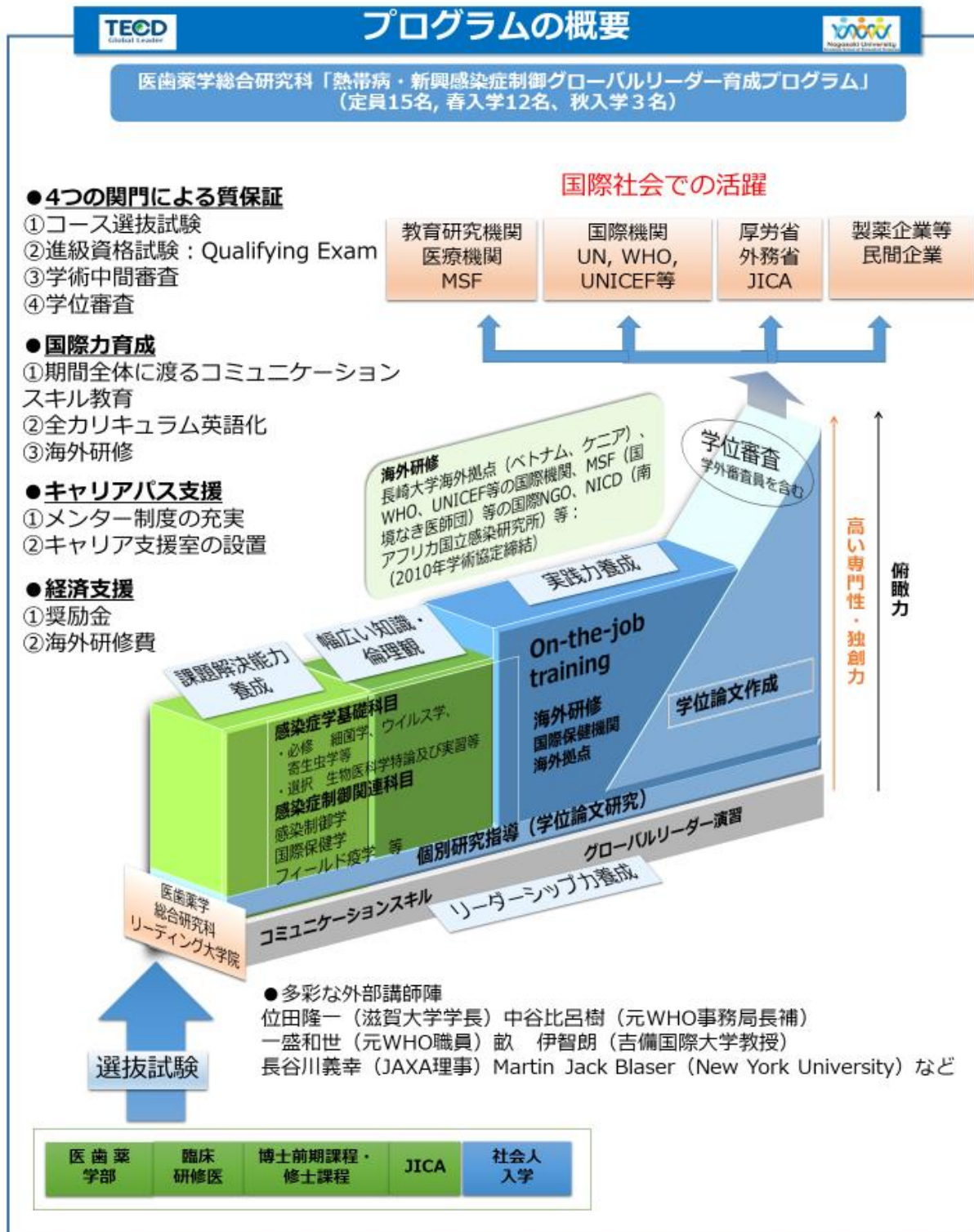
### 【優位性】

長崎大学は熱帯医学研究所および医歯薬学総合研究科・新興感染症病態制御学系専攻を中心として熱帯・新興感染症の教育・研究に関わる教授陣を増強し、関連する海外学術機関や国際機関との連携を強化してきた。特に 2003 年からの 21 世紀 COE プログラム「熱帯病・新興感染症の地球規模制御戦略拠点」、2008 年からのグローバル COE プログラム「熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略」によって研究教育体制は飛躍的に向上し、研究成果も増加している。2005 年、熱帯医学研究所は WHO から「熱帯・新興ウイルス感染症に関する」WHO 研究協力センターに指定され、世界的な認知度も高まっている。また、同年からケニア共和国ナイロビ市とベトナム社会主義共和国ハノイ市に大学教員が常駐する研究施設を開設し、アフリカ・アジアでの教育、研究インフラを整備している。加えて、2008 年より独立研究科の国際健康開発研究科 (修士課程, 定員 10 名) を立ち上げ、8 か月の長期海外研修を実施しており、そのノウハウを有する。さらに、2010 年には文部科学省最先端研究基盤事業により感染症創薬機器と病原体可視化研究のインフラを整備充実しており、熱帯病・新興感染症について国際的レベルでリーディング大学院プログラムを実施できる優位性を有している。



プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)



**プログラムの成果**

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成するという観点に照らし、学生や修了者の活躍状況を含め、アピールできる成果について記入してください。)

**【政策立案スキル教育の強化】**

学生の政策立案スキルを強化するため、当プログラムでは課題解決型授業を取り入れた。本授業では、学生はグループワークを通し与えられた課題を解決する提案を準備し授業において発表し、教員との間で、あるいは学生間で議論をする。また、討論能力を養うため、コミュニケーションスキル教育として実務経験者による双方向トレーニングも導入した。これらの授業はすべて英語で行い、一部の学生は海外研修に WHO 等の政策立案機関へ派遣された。さらに、WHO 等の国際機関で勤務経験のある現職・OB の専門家を講師陣に加え、政策立案人材のロールモデルを学生に提示した。これらの教育システムにより、グローバルな視点で課題解決方法を見つけ出し、自分の意見を他者に伝える能力の高い人材を育成する一方で、学生と当該分野の第一線の専門家との間に、キャリアパスへと続く多くの接点を提供した。

**【教育研究活動のグローバル化】**

プログラム実施期間を通して、複数のプログラム教員 (PI) が開発途上国で実施される熱帯病・新興感染症対策関連の大型プロジェクトを次々と獲得した (例えば SATREPS 事業 (3 件: ケニア, 南アフリカ, ガボン), e-Asia 事業 (3 件: フィリピン, ベトナム, 米国等), メリンダ・ゲイツ財団事業 (1 件: ベトナム) など)。これにより、プログラム学生が PI のプロジェクトに参加することで、海外での実務的な経験値を高める教育・研究プラットフォームが強化された。

**【リーディングプログラム学生と他の学生との違い】**

従来の博士課程に在籍する学生とリーディングプログラム学生とを比較すると、リーディングプログラム学生は熱帯病・新興感染症制御領域において高い専門性を有するだけでなく、それ以外の分野にも積極的に取り組む姿勢が見られる。また、グループ学習を通して高い協調性と団結力を示している。課題解決型授業およびコミュニケーションスキル教育による高い情報分析能力と、学会等における表現能力も涵養されている。当プログラム主催の交流会、市民シンポジウム、地域の小中学校や子ども霞ヶ関見学デーにおける「子ども感染症教室」、市内高校における感染症や国際保健に関する講義などを自主的に企画運営し、地域貢献活動への活発な取り組みも見て取れる。また、英語版地震対策ガイドブックを作成・出版し、それを NHK の報道を通して宣伝するなど、メディアの活用にも長けており、事業のマネージメント力、リーダーシップ力は明らかに高い。

**【就職・キャリアパスの実績】**

現在までに 15 名 (留学生 11 名, 日本人 4 名) が当プログラムを修了した。内 5 名 (留学生 4 名, 日本人 1 名) が日本国内の研究・教育職に、7 名 (留学生 6 名, 日本人 1 名) が国外 (タイ, アメリカ, ミャンマー, ガーナ, ベトナム, オランダ, ケニア) の研究・教育・行政職に、日本人 1 名が厚生労働省に就職した。

**【論文掲載数・受賞】**

プログラム学生は国際ジャーナルに筆頭著者論文 40 報, 筆頭著者以外の論文 49 報, 国内ジャーナルに筆頭著者論文 5 報, 筆頭著者以外の論文 7 報を発表している。修了した学生 15 名に限ると、国際ジャーナルにおいて筆頭著者論文 35 報を発表し、一人平均 2 報以上の論文を発表して学位を取得している。また、国際学会の Young Investigator Award, 国内学会の Best Presentation Award, 博士課程教育リーディングプログラムビジネス構想コンペティション特別賞および優秀賞, 博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2017 ベストプレゼンテーション賞を受賞した。

**プログラムの成果**

(大学院改革につながる教育研究組織の再編等の学内外への波及効果や課題の発見について記入してください。)

**【完全英語化教育システムの構築】**

本学では学長のリーダーシップのもと、グローバルに活躍する人材育成をめざした改革が全学的に推進されている。本プログラムはそれを先導し、完全英語化教育システムの構築と実践を達成し、本学のグローバル人材育成の理念を具現化した先行モデルと位置付けられている。完全英語化教育では、日本人学生と留学生の英語力の差が課題となるが、本プログラムのコミュニケーションスキル教育で行った様々な取り組みは、この問題に対する解決策の一端を示すことに成功した。

**【授業カリキュラム】**

ウイルス、細菌、寄生虫、感染免疫といった感染症の各分野を、事前に準備した提案を口頭発表し、教員および他の学生との議論を通じて包括的に学ぶ課題解決型授業は、本カリキュラムの特徴の一つである。また、倫理学、医療人類学、国際経済学、国際法学といった幅広い分野の開講授業も、俯瞰力を有する国際的リーダーの育成に大いに役立っている。本プログラムでのこれらの教育実績は、平成 27 年度に開設された熱帯医学・グローバルヘルス研究科（修士課程）のカリキュラムにおいても、優れた先行事例として多大な影響を与えている。また、ベトナムとケニアの研究拠点との間に整備したポリコムや e-Portfolio を用いた遠隔教育システムは、プログラム学生が海外研修および研究活動と授業との両立をはかるために必須の役割を果たしてきた。今後もフィールド活動が必須の熱帯病・新興感染症制御領域の重要な教育システム基盤として運用されると考える。

**【リーダー能力・達成度評価システムの構築】**

本プログラムでは **Qualifying Examination** として、全授業科目での評価に加え、課題解決能力を問う **In-class Examination** を実施してきた。国際的社会問題との関連性を考慮し俯瞰的かつグローバルな視点で問題解決に臨めるかを問う課題が出題され、英語による発表と質疑応答を通じ、問題把握能力・プレゼンテーション能力・提案力・ディベート力などを総合的に判定してきた。このような達成度評価システムは、熱帯医学・グローバルヘルス研究科の博士後期課程（平成 30 年 10 月開設）を含む他の大学院でも取り入れられるべき優れた評価システムであると考えられる。

**【PDCA サイクルの構築およびプログラムの改善】**

本プログラムでは、外部有識者会議および学術委員会を設置し、外部からの客観的な評価を行うとともに、学生部会による内部評価やリーディング教員による自己評価を通じて、プログラムの改善を図ってきた。例えば、授業と研究の両立による学生への過度な負担が指摘されたことを受け、授業カリキュラムの大幅な見直しを行った。これらの評価体制から得られた知見は、本学の大学院改革においても非常に役立つものと期待される。

**【全学教育・学部教育・新設博士教育への波及効果】**

本プログラムでは、国際的に活躍している人物を外部講師として招き、特別講義や市民公開シンポジウムを開催してきた。これらの多くは本プログラムの学生以外にも開放し、全学の学生や教員の意識改革を促すことに繋がってきた。プログラム教員・学生は、学部学生の英語コミュニケーション能力向上の場として設けられている **English Café** や学部モジュール（医学部）に参画するなど、全学教育や学部教育のグローバル化にも貢献してきた。加えて、平成 30 年 10 月に開設する熱帯医学・グローバルヘルス研究科の博士後期課程には本プログラムの教員 5 名が移籍し、4 年制大学卒業者が入学できる完全英語化された 5 年一貫制博士教育（博士前期・後期）の拡充に貢献することとなった（熱帯医学・グローバルヘルス研究科博士課程）。

**【事業継続と今後への発展】**

医歯薬学総合研究科の本プログラムと熱帯医学・グローバルヘルス研究科の博士後期課程がコアとなり、学内外の関連研究科や教育研究機関等を糾合し、本学の強みである熱帯医学・新興感染症、放射線健康リスク、国際保健といった領域を中心に、熱帯医学・グローバルヘルス分野で世界をリードする優れた人材をさらに輩出していくことに、今後も熱意をもって取り込む所存である。